

論文の内容の要旨

氏名：渡 部 愛

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：胃・大腸重複癌の同時性・異時性治療の比較

背景：重複癌の中で胃癌と大腸癌は最も頻度の高い組み合わせであると報告されている。しかし胃癌と大腸癌との重複癌に限定した予後の検討はこれまで為されておらず、発症の時期や罹患する順序によって予後に差があるか否かは分かっていなかった。

目的：胃と大腸の重複癌が同時性に発症した場合と異時性に発症した場合での臨床病理学的特徴および予後について比較検討を行った。

方法：日本大学医学部附属病院において1990年から2014年までの25年間に、胃癌および大腸癌に対し手術あるいは化学療法を行った5491症例の中から、胃と大腸の重複癌症例を抽出した。これらの重複癌症例を胃癌および大腸癌の発症時期により同時性胃・大腸重複癌と異時性胃・大腸重複癌に分類し、臨床病理学的特徴および予後について検討を行った。異時性胃・大腸重複癌については癌に罹患した順序により更に胃癌先行症例と大腸癌先行症例とに分類し同様に検討を行った。

結果：全5491症例のうち、胃・大腸重複癌と診断された症例は117例(2.1%)であり、観察期間の中央値は39ヶ月(0-319ヶ月)であった。このうち同時性胃・大腸重複癌は59例(50.4%)、異時性胃・大腸重複癌は58例(49.6%)であった。同時性胃・大腸重複癌に比べ異時性胃・大腸重複癌では、胃癌が根治性のある病期で診断される割合が有意に高く($p=0.04$)、大腸癌の治療方針として手術を選択される割合が有意に高かった($p=0.01$)。5年生存率は同時性胃・大腸重複癌が61.3%、異時性胃・大腸重複癌が81.7%であり、異時性胃・大腸重複癌の方が有意に長かった($p=0.03$)。単変量解析では胃・大腸重複癌が異時性の発症であることが予後因子と規定された。また異時性の胃・大腸重複癌のうち、胃癌先行症例は32例(55.2%)、大腸癌先行症例は26例(44.8%)であった。第一癌から第二癌までの間隔は、両群間で統計学的有意差を認めなかった($p=0.13$)。5年生存率は胃癌先行症例が89.2%、大腸癌先行症例が72.4%で、胃癌と大腸癌のどちらに先に罹患するかで予後に差は認めなかった($p=0.17$)。

結論：異時性の胃・大腸重複癌は根治性のある病期で診断される傾向にあり、同時性の胃・大腸重複癌と比較して予後良好であった。